



関西大学

大阪都市遺産研究センター

Newsletter

No. 1 2010 年 10 月 31 日

目次

大阪都市遺産研究センターの設立にあたって	1
「豊臣期大坂図屏風」を関西大学リサーチアトリエに出版	2
『大阪時事新報』記事調査	2
『キネマ旬報』記事調査	3
ピースおおさか（（財）大阪国際平和センター）所蔵資料の調査	3
特別任用研究員、R.A. の任用	4
大阪都市遺産研究センターについて	4

大阪都市遺産研究センターの設立にあたって

平成 22 年 7 月 10 日（土）、大阪都市遺産研究センターの設立にあたり、関西大学大阪都市遺産研究センターの 1 階セミナー室にて第 1 回合同例会が開催された。藪田貫氏（関西大学文学部教授・センター長）のあいさつに続いて、大谷渡氏（関西大学文学部教授・サブリーダー）から本センターの研究計画が説明された。

大谷氏によると、本センターの事業は、平成 17 年度から 21 年度にかけて展開された「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」の事業を引き継ぎ、より展開させていくものと位置づけられる。都市「大阪」に蓄積されてきた都市遺産を史的に検証し、その継承と発展を目指すものである。

都市「大阪」は、豊臣秀吉による大坂城築城および城下町の形成からはじまり、明治から昭和初期にかけて、その景観を大きく変貌させてきた。大阪都市遺産研究センターでは、こうした都市景観の変貌を検証する。本センターで検証する「景観」とは、単に視覚的な現象のみを指すものではなく、人びとの暮らしの息づかいが伝わる生活と文化のすべてをも含んだものと位置づけられる。したがって、社会生活・文学・芸能なども研究対象とし、「形」と「心」の両面からその変化を具体的に跡付けてゆくとのことである。

続いて、大阪都市遺産研究センター研究員の橋寺知子氏（関西大学環境都市工学部准教授）と林武文氏（関西大学総合情報学部教授）による研究発表があった。

橋寺氏の発表は「戦前の船場・堺筋周辺の文化景観—プロジェクト研究開始にあたって—」と題し、都市遺産を研究する上で、堺筋と船場が持つ意味を考察するものであった。橋寺氏は、堺筋の沿道空間に関する研究や御堂筋の景観に関する研究、船場のビルディングに関する研究などを紹介し、今後の研究計画としてアメリカ戦略爆撃調査団による記録映像を利用することで、大阪の近代建築や都市景観変遷に関する新しい視覚がもたらされ、大阪都市遺産の研究に資することができるであろう



とした。

林氏の発表は「CGによる大阪都市景観の復元—基礎検討とCG試作の紹介—」と題するものであった。本センターでは、CGを用いて研究成果を可視化することが計画されている。しかし精密なCGを制作する上で予測される課題があり、それらの課題と対応策が説明された。

林氏によると、3次元CGの制作にあたり、制作区域・制作年代の絞り込みのほか、建物の構造や質感を再現するための資料収集が必要とのことである。また2次元CGの制作では、GIS（地理情報システム）等の機器が必要になる可能性もあるとのことであった。



「豊臣期大坂図屏風」を関西大学リサーチアトリエに展出

関西大学大阪都市遺産研究センターでは、本センターの前身にあたる「なにわ・大阪文化遺産学研究所」から引継いで、オーストリア・エッゲンベルク城で発見された「豊臣期大坂図屏風」の研究を進めている。本センターは、研究のために「豊臣期大坂図屏風」の複製を制作・所蔵している。

一方、関西大学社会学研究科では平成22年度より「社会的信頼システム創生プロジェクト」が文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、7月9日、天神橋筋3丁目に「関西大学リサーチアトリエ」を開設した。「関西大学リサーチアトリエ」の開所式にあたり、本センターから「豊臣期大坂図屏風」複製を展出し、社会的信頼システム創生プロジェクトのスタートに華をそえた。

「豊臣期大坂図屏風」展出にあたり、本センター特別任用研究員の櫻木潤・内田吉哉とRA（リサーチ・アシスタント）の藤岡真衣・和住香織が設営のために出張した。開所式では本センター研究員の高橋隆博氏（関西大学文学部教授）が「豊臣期大坂図屏風」の解説をおこなった。また、関西大学リサーチアトリエのオープニング期間中、来場者に大阪都市遺産研究センターが作成した「豊臣期大坂図屏風」解説パンフレットが配布された。



『大阪時事新報』記事調査

大阪都市遺産研究センターでは、基幹テーマの研究活動として『大阪時事新報』の記事調査を行っている。

『大阪時事新報』は明治38年（1905）に創刊され、昭和26年（1951）まで発行された新聞である。『大阪時事新報』創刊の明治38年は日露戦争の時期にあたる。日本の資本主義が確立していった時期である。

大正14年（1925）4月1日、東成郡・西成郡を編

入して大阪市域が大幅に拡張され、昭和5年（1930）には、大阪市の人口は100万人を超えた。いわゆる大正末期から昭和初期にかけての「大大阪」と呼ばれた時代である。『大阪時事新報』はまさに「大大阪」時代の膨大な情報を掲載した新聞であるといえる。同時代の新聞に『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』等があるが、これらと比較しても『大阪時事新報』の大阪に関連する記

事は非常に詳細なものがある。

本研究センターでは、『大阪時事新報』の記事から文芸・映画・建築・社会動向に関するものを調査し、大阪都市遺産研究の基礎データとして活用してゆく。調査には、大谷渡氏（関西大学文学部教授）・増田周子氏（関西大学文学部教授）・橋寺知子氏（関西大学環境都市工学部准教授）・笹川慶子氏（関西大学文学部准教授）があたる。膨大な記事情報を整理するため、文芸・映画・建築・社会動向の各テーマに沿って関連する記事を選別し、記事目録を作成している。これらの記事目録は、本センターから『大阪都市遺産研究叢書』として順次刊行される予定となっている。



『キネマ旬報』記事調査

『キネマ旬報』は1919年（大正8）年7月に東京で創刊され、1940年（昭和15）12月、戦時統制を理由に終刊するものの、1950年（昭和25）10月に復刊し、現在も発行を続けている映画雑誌である。

『キネマ旬報』は創刊以来、毎月1、11、21の発行日による旬報として、月に3回発売された。終刊の1940年12月までの21年5か月間、この発行形態は維持されてきた。この発刊形式は、その頃の上映館の封切にタイミングを合わせての刊行である。

この頃の大阪では、1920年（大正9）に帝国キネマ演芸会社が設立された。撮影所は現在の東大阪市の小阪に小阪撮影所が、1929年（昭和4）には長瀬撮影所が建設された。また、1923年には兵庫県芦屋市に芦屋撮影所が設けられている。

そこへ1923年9月の関東大震災により、東京方面の映画製作が打撃を受け、映画の製作の機能が関西に移された。大阪が拠点の帝国キネマ演芸は、映画供給の不足を補うために小阪・芦屋の両撮影所で1か月に14本もの映画を製作した。

その後、帝国キネマは人気スターや監督・脚本家らを引き抜き、社業を拡張させたが、それほど人気は上がらず、興行的には不振が続いた。そのために内部に紛争がおこったり、1940年には長瀬撮影所が全焼したことで業績が悪化し、その営業権は松竹株式会社へ引き継がれることになった。

『キネマ旬報』も関東大震災後はいったんは休刊したが、その年の11月21日号（第144号）復活記念号として発刊した。その巻頭言のなかで「東に復興の帝都、西に再起の我等」とあるように、『キネマ旬報』は兵庫県武庫郡西宮町に拠点を移し、編集を続けたのである。西宮では、1927年（昭和2）12月に本社を東京に移転させるまでの約4年間発行された。

当センターでは、この『キネマ旬報』を創刊年の1919年から1940年12月の第735号終刊特別号までを所蔵しており、大阪に関連する映画の情報を収集している。これらの情報により、近代大阪における映画産業の発達や、大阪の人びとが映画をどのように受け容れていったのかを分析する。



ピースおおさか（(財)大阪国際平和センター）所蔵資料の調査

近代大阪の都市景観を復元するにあたって、明治から昭和初期の地図・写真などの基礎資料の調査・収集に着手した。もっとも基礎的データとなる地図資料については、昭和20年（1945）前後の期間には国土地理院発行のものがなく、この時期においては、都市景観復元のための資料として写真や映像が貴重な資料となることが判明した。ピースおおさか((財)大阪国際平和センター)には、昭和21年にアメリカの戦略爆撃調査団が、上空と地上から大阪中心部を撮影した映像が所蔵されており、同館において、その他の写真や映像資料を含めた所蔵調査を行った。調査の成果は第1回研究例会において発表する予定である。

今後も近代大阪の都市景観復元のための基礎調査を継



続するとともに、研究機関だけではなく、さまざまな資料を広範に収集する必要があるため、センターの研究行事の際に、参加者から写真や映像資料についての情報提供を募ることも計画している。

特別任用研究員、R.A.の任用

関西大学大阪都市遺産研究センターでは、7月1日より特別任用研究員、R.A.（リサーチ・アシスタント）として、以下の4名を任用した。

内田 吉哉（特別任用研究員）
櫻木 潤（特別任用研究員）
藤岡 真衣（リサーチ・アシスタント）
和住 香織（リサーチ・アシスタント）

大阪都市遺産研究センターについて

大阪都市遺産研究センターは、関西大学千里山キャンパスにあります。関西大学博物館（簡文館）に隣接した、増築棟の中にあります。

また簡文館は、関西大学で最も古い建築物で、登録有形文化財（建築）に指定されています。



関西大学大阪都市遺産研究センター NewsLetter No. 1 2010年10月31日発行

発行・編集 関西大学大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06-6368-0095 FAX 06-6368-0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/osaka-toshi/>

mail osaka-toshi@ml.kandai.jp